

ホロコーストから見た人間の道徳性

柴 嵩 雅 子*

Morality in the light of the Holocaust

Masako Shibasaki*

Abstract

Studies on the Holocaust have revealed that those involved in the despicable horrors were not abnormal sadists but ordinary people. This paper examines ethical problems raised by this unpalatable reality. The first part, drawing on socio-psychological experiments as well as historical research on Nazi Germany, demonstrates that legitimizing authority or peer pressure can easily prod us into harming others, and that we are not such autonomous moral agents that we are usually assumed to be. Secondly, I explore sanctioned killings. Analogous to soldiers slaughtering enemy combatants, people have no pangs of guilt in exterminating targeted individuals, once they are branded as dangerous beings and expelled from the moral community. The last section suggests what we can do in ethical education to forestall another Auschwitz.

キーワード

ジェノサイド、倫理、罪責、ミルグラム、刑務所実験

*初めに

1938年1月13日、南京で仕事をしていたドイツ人のクリスチアン・クレーガーは、1ヶ月に及ぶ日本兵の蛮行を記録した文書を作成し、「日本軍がいかに厳しい服従原理に統率されているか、しかしいったんこれが弛緩したり、意図的に打ち捨てられたところでは、アジア的な野蛮がその残虐性を露にし、人間の内面的道徳を消失させることを知るにつけ、失望は深まるばかりである」と締めくくっている¹⁾。同じく、南京事件の目撃者となった駐華ドイツ大使館事務長のパウル・シャルフェンベルクは、漢口のドイツ大使館に当てた報告書で、こう述べている。「南京入場のさいの日本軍の所業については、語らぬに越したことはない。チンギス=ハーンを思いださずにはいられないほどの徹底した破壊ぶりであった。[……] 日本兵は、1918年当時の黒人兵同様、こう言い含められていたに違いない。『ここで頑張った奴はみな、南京で美しい娘をモノにできるぞ』。こうして南京に残っ

*しばさき まさこ：大阪国際大学人間科学部教授〈2007.4.30受理〉

ていた女という女はまったくひどい目にあわされた。[……] 日本軍は統制が失われたと言えば簡単だが、私はそうは思わない。アジア人の戦争の進め方は、われわれとは異なるのだ。日本と中国の立場が逆でも、事態に大差はなかっただろう」²⁾。クレーガーもシャルフェンベルクも、略奪・虐殺・放火・強姦は「アジア人」か「黒人」の専売特許で、自分たちのような文化の進んだドイツ人はそんな非道を犯さないと信じ、ほんの数年後にドイツ人がソ連で絶滅戦争を繰り広げ、ユダヤ人をガス室で殺害するようになるなどとは、全く予想していなかったのだろう。こうした自惚れは日本側も同様である。南京陥落の知らせに、昼は旗行列、夜は提灯行列で勝利を祝った内地の日本人は、皇軍の破廉恥ぶりをまったく想像していなかったのである。

ドイツや日本に限らず、凄惨な事件は異常で邪悪な人間が犯すものであり、私は正常で悪い人間ではないから、虐殺などに加わらないという三段論法は、自分をよいものと考えたがるナルシズムと自己防衛から広く信じられている。第三帝国の強制収容所における瘦せこけた死体の山の映像を見ると、「なぜこんな残虐なことができるのか」という疑問が浮かび、自分と同じ人間がこんな悪魔のような所業を仕出かしうとは思いたくないので、ヒトラーやSS隊員やナチスといった、自分とは違う「異常な」人々の犯罪だと理解したくなるかもしれない。あるいは、普通のドイツ人ではなく、あくまで全体主義や独裁政治といった体制が悪いと考えたくなるかもしれない。しかし近年のホロコーストの歴史研究は、ナチスやSS隊員だけでなく、普通の人々が大量殺戮に参加・協力していた事実を突き止めてきた。また第二次世界大戦後も各地で起きた民族紛争やジェノサイドの研究、及び人間の行動に関する心理学的実験は、国や民族に関係なく、普段なら想像もできないような凄惨な悪事を人間は実行できることを明らかにしてきた。ジークムント・バウマンが『近代とホコースト』で述べたように、「ホロコーストとその実行者について知りえたことがもたらした最も恐ろしい結論は、『このこと』が私たちにも起こるかもしれないということではなく、私たちがそれを仕出かしうることなのである」³⁾。本稿ではまずこの点を再確認するために、ホロコーストを結果的に引き起こした人間の道徳的脆弱さを(1)で指摘し、その一般性を実証する心理学の実験を(2)で取り上げる。(3)では道徳そのものに内在する危険性を解明し、(4)ではアウシュヴィッツを再現させないための指針を、アーヴィン・ストープに依拠して考察する。

1) ホロコーストが露呈した道徳的脆弱性

①魅力的だったヒトラー政権

そもそもヒトラー政権は、どれほど裏で不正を行なったにせよ、クーデターや革命ではなく、れっきとした選挙に基づき誕生したことを忘れてはならない。1928年から5年ほどの間に得票率を2.6%から37.3%に伸ばしたナチ党は、1932年7月の国政選挙で第一党の地位を獲得した。過半数の支持は得られなかったとはいえ、左翼陣営の社会民主党と共産党をしのぐ1300万人もの有権者がヒトラーを支援したのである。さらに総統就任後、ヒトラーは国民の間で圧倒的人気を得た。

ドイツでは第一次世界大戦後、人々は経済的混乱と社会的混沌に苦しんでいた。何とか

食いつなぐことに必死だった大衆にとって、民主主義的なヴァイマル共和国により印象が持てるはずもなかった。そこにヒトラーが新しい希望の星として現れ、実際に新政権は大恐慌を克服し、国内の失業問題を解決してくれた。ともかく自分の生活を改善してくれる政治を、人々が支援するのは当然である。そのうえヒトラーは国民的恥辱の源だったヴェルサイユ体制を打倒し、ラインラントへの進駐、さらにはオーストリア併合と、稀に見る外交的成功を成し遂げた。ドイツ国民としての大きな自信を取り戻してくれた指導者に、人々が熱狂するのも無理はない。ロバート・ジェレイトリーは『ヒトラー支持』で、「多くのドイツ人が従ったのは、彼らが心なきロボットだったからではなく、ヒトラーの強みや新しい独裁政治の『肯定的』側面を確信したからである」と述べている⁴⁾。

政治は利害に基づく。何よりも自分の利益を最大に拡張することを約束してくれる政治家を選択するのは、民主主義国家でも普通のことである。たとえ自分の生活を改善してくれても、社会の一部を苦しめるような政党や政治家は選ぶな、といった法律は存在しない。そうした配慮はあくまで各人の倫理的判断に任されている。だからこそ今なお多くの民主主義体制下で、少数派は弾圧とまでは行かずとも、法的に不利な扱いを受けたり社会で冷遇されたりしているのである。

②テロは他人事

ホロコーストに関する映画や一般向けの書物の多くは、犠牲者であるユダヤ人の視点から描かれているので、第三帝国は恐ろしいテロが吹き荒れる警察国家のように思われがちだが、ジェレイトリーは第三帝国を「同意に基づく独裁制」と呼び、こう指摘している。「ヒトラーはスターリンとは異なり、社会の大部分を威嚇して無理やり自分の意志に屈服させるようなことを、決してやろうとはしなかった。……『テロ』は全国民を統治し統制するための支配戦略として作られたのではなく、すでに社会の脇に追いやられるか、何らかの意味で威圧を与えると考えられていた『明白な敵』をターゲットにしていた」⁵⁾。「理想化された『法と秩序』を取り戻したいと願う『よき市民』にとって、収容所のイメージはヒトラー政権のテロリスト的側面でさえ受け入れることを容易にした。新聞には、新体制の手によって苦しんでいるのは、『他の』人、つまり共産党員や社会的アウトサイダーやユダヤ人だと書いていたからである」⁶⁾。

ユダヤ人虐殺の犠牲者数として「600万」という数がよく持ち出されるため、ユダヤ人が非常に多いように錯覚を起こしがちだが、殺害されたユダヤ人の多くはポーランドに住んでいた。1933年の時点で、ドイツの人口約6500万人のうち、ユダヤ教徒として登録されていた人は50万人ほどに過ぎない。また共産主義者も主流派ではなく、ユダヤ人と同様に絶滅の対象になったシンティ・ロマや、迫害された同性愛者やエホバの証人にしても、その数は高が知れている。ゲシュタポによる搜索や逮捕、収容所送りといった暴力的な支配手段は、大多数のドイツ国民にとって無縁の「他人事」だったのである。イアン・カーショも、ナチのテロや弾圧が、左翼政党と関係しているとみなされた労働者、ユダヤ人、シンティ・ロマ、同性愛者、物乞いなどの反社会的分子に限定され、「きわめて選択的に実行された」ことを指摘している。「これに対して、企業家や大土地所有者、銀行家に累

は及ばなかった。……『教会闘争』が行なわれたにもかかわらず、ドイツ人司教はひとりとして強制収容所に入れられることはなかった。……農村部では農家や小地主への介入は全く見られなかった」⁷⁾。普通のドイツ人にとって、ナチが揮ったテロは自分を危険に陥れるものではなく、むしろ理想の民族共同体にとって邪魔になる「共同体異分子」を片付けてくれる良策だったのである。また反ユダヤ主義は単なるイデオロギーとしてユダヤ人を排除するだけでなく、「商売仇を排除したり、不愉快な隣人を路上にたたき出したり、あれこれの不動産を恥知らずの価格で没収したり」⁸⁾できるなど、多数派の「アーリア人」には経済的利益をも、もたらしてくれたのである。

③知られていた虐殺

戦後ドイツでは、「ユダヤ人大虐殺は知らなかった」という弁解がよくなされた。プロパガンダのせいでもナチ政権のいい面しか見ることを許されず、その恐ろしい裏面は知らされていなかったというわけである。確かにホロコーストは国家の機密事項であり、ガス室を利用した殺害が公に報道されることはなかった。そのうえアウシュヴィッツを始め絶滅収容所はすべてポーランドに設置されていたので、「虐殺など全く知らなかった。移送されたユダヤ人たちは東方のキャンプで労働させられていると思っていた」という言い逃れが長い間、通用してきたのである。

しかし、E・A・ジョンソンの『ナチのテロ』は、①1995年に初めて公刊されたヴィクトール・クレンペラーの日記『私は証言する、最後まで。日記。1933-1945年』、②当時、多くのドイツ人が非合法ながら聞いていたBBCドイツ語放送のスク립ト、③1993年に高齢者を対象に実施された調査と、その参加者へのインタビュー、の三点を証拠として挙げ、遅くとも1943年初頭には、大虐殺の詳細な情報が入っていたので、ドイツ人は知らずにはおれなかったと結論付けている⁹⁾。

ギュンター・アンダーースも『冥府めぐり』で、ドイツ人がホロコーストの情報を与えられていたと、激しい口調で告発している。「共犯者と目撃者の数は数万に及ぶ。それだけの人がことごとく口をつぐんでいたとか、あれほどセンセーショナルな事件の噂が燎原の火のように広がらなかった、などと想定するのは理不尽であり、社会心理学における最も単純な公理に反する。何も知らなかったと主張する人はせいぜい、あの頃の自分はバカだったと認めているに過ぎない。当時、アメリカに住んでいた私でさえ、1943年の夏にはもう絶滅収容所に関する最初の風聞を耳にしていた。そして1944年の春には、それが事実だと知っていた。収容所での出来事に何千倍も密接につながっていたドイツで、何も知らなかったと言うのだろうか」¹⁰⁾。さらに彼は人間の常として、知識が行動と結びつくわけではないことにも言及している。「『知る』というのは、関与の形態の中でも最も薄弱なもので、『関与しない』とほとんど変わらない」¹¹⁾。確かに犯罪に関する知識や情報を得たからといって、すぐにそれに対する抗議や非難の思いを行動に移すとは限らない。心の中では反対しながら、それを積極的に表明しないことも多い。

ただナチ・ドイツにおいても、非人間的な措置を「知って」、それに反対する「行動」を起こした例はある。ここではそのうち顕著な例を二つ挙げておこう。一つはT 4作戦に

関するものである。1940年1月から1941年8月まで、「安楽死」の名目で、精神病患者を主とする7万人あまりの障害者が殺害された。このT 4作戦はあくまで秘密裏に進められ、犠牲となった障害者の家族には、病院や施設からいきなり死亡通知が届く。しかし、10年前に盲腸炎を済ませていたのに死因が盲腸炎となっていたり、障害児を持つ親通しが見比べてみると、死亡日が同じであったりした。自分たちの家族は障害ゆえに実は殺害されたのだと「知った」人々は、「激しく怒り、怒りを隠そうとしなかった。当局への苦情、マスコミへの投稿、訴訟」¹²⁾といった形で「行動」に出た。さらにこの安楽死作戦については、カトリックもプロテスタントも教会が反対した。特に有名なのはミュンスターのフォン・ガーレン司教で、説教壇から政府の機密計画を暴くだけでなく、ミュンスターの検事や警察署長に手紙で告発を行なった。「こういった精神病患者の不慮の死が自然の理由による場合はほとんどありません。たいてい人為的なものです。これは『生きるに値しない』と見なされる者の抹殺、つまりその存在が民族や国家にとって生産的でないと見なされた場合に何の罪もない人間の殺害を許可する思想に沿うものです。このいまわしい概念は罪もない者を殺すのを正当化しようとし、働けない病人や弱者や不治の者、衰弱した老人を殺すのを許しています。この思想に直面したドイツの司教はここに宣言します。何人も罪もない人間を殺す権利はない」¹³⁾。フォン・ガーレンはゲシュタポに捕まりもせず、消されもしなかった。そのようなことをしてミュンスター市民の反感を買うことを、ナチスは避けたのである。

二つ目は、ベルリンのローゼン通りで繰り広げられたデモである。1943年2月、まだベルリンに潜伏していたおよそ1万人のユダヤ人をゲシュタポは逮捕してアウシュヴィッツへ送ったが、そのうち約2千人はドイツ人と結婚していたため、一時的にローゼン通りにある施設に収容された。ユダヤ人の夫が逮捕されたことを「知った」ドイツ人の妻は、次々に収容施設付近に馳せ参じ、その数は日ごとに膨れ上がって自然発生的に反対デモの形を取るようになった。警察やSS隊員が銃で脅しても、「夫を返せ」のシュプレヒコールは止まず、約一週間後、その願いはついにはかなえられたのである¹⁴⁾。

どちらの例でも犠牲になっているのは自分の子どもや夫であり、「他人事」では済まされなかった。だからこそ知っただけで終わらず、積極的な行動に出たのだろう。ベルリンで果敢な抵抗運動を展開した女性たちも、それ以前、他の多くのユダヤ人が移送されていたときには何もしていない。またドイツ人の障害者の殺害については、ナチ指導部をものともせず、強烈な弾劾を行なったフォン・ガーレン司教も、ユダヤ人の虐殺については黙したままだった。

④反ユダヤ主義の激化

では、ソ連における虐殺やポーランドの絶滅収容所について知っていながら、告発の手紙をヒトラー政権に送りもせず、ましてや反対運動を起こしもしなかったドイツ人は、暴力的な手段でユダヤ人を根絶やしにしたいと心から願っていたのだろうか。大論争を巻き起こしたダニエル・ゴールドハーゲンが主張したように、普通のドイツ人は極度の反ユダヤ主義に染まった「ヒトラーの自発的死刑執行人」であり、だからこそホロコーストが実

行できたのだろうか¹⁵⁾。この点も多く歴史家は否定している。ピーター・マークルの調査によれば、一般のナチ党員でさえ、重視したイデオロギーは、「民族共同体」が31.7%であるのに対し、「明白な、ないしは付随的な反セム主義は13.6%にすぎない」¹⁶⁾。ユダヤ人の横暴に対する対抗措置として喧伝された1933年4月1日ユダヤ人商店のボイコットは、大多数のドイツ人には不評だった。1938年11月には、ゲッベルスの企画でシナゴグの放火、ユダヤ人商店の破壊が行なわれたが、この有名な「水晶の夜」事件は党内部からも顰蹙を買った。古株のナチ党員で経済相のヴァルター・フンクは、「ゲッベルス、君は狂ったのか、こんな無茶をして。ドイツ人であることを恥じなければならん。対外的な威信はすべて失われるぞ」と宣伝相を叱責した¹⁷⁾。ゲーリングもヒトラー自身も、こうしたポグロムには否定的だったのである。

もちろんドイツに反ユダヤ主義がなかったわけではない。少なくともほとんどのドイツ人が、ユダヤ人は「自分とは違う人間」と思っていた。さらにプロパガンダを真に受けて、「国際ユダヤ人」の陰謀を恐れたり、「劣等人種」であるユダヤ人を蔑む人は少なくなかっただろう。しかしそれはあくまで、当時、他のヨーロッパ諸国やアメリカでも普通に見られた程度の反ユダヤ主義であって、決して全ユダヤ人の肉体的消滅を願う絶滅志向の反ユダヤ主義ではない。ヒトラーをはじめナチ指導部でさえ、明白に反ユダヤ主義を標榜していながら、当初はユダヤ人の国外移住を実施し、さらにはマダガスカル島への移住を計画するなど、ドイツ人とユダヤ人の住み分けを目指していただけだった。それが戦争の進展により絶滅へと方針転換をしたのである。

ゴールドハーゲンが主張するように、普通のドイツ人が始めから絶滅志向の反ユダヤ主義者だったためにホロコーストが起きたというのが真実であった方が、私たちににとっては気が楽である。まず、ユダヤ人であれ何人であれ、他民族を根絶やしにしたいなどとは願っていない自分たちは、決して虐殺に加担しないと安閑としていられるからだ。また、明確な意図がまずあって、それを行動に移したという説明は、たとえそれが殺意に基づく殺戮であったとしても、人間は主体的に行動するという、通常私たちが当然視している前提に則っているからだ。しかし実際は、「ドイツからユダヤ人はいなくなるべし」という、共生を拒否する程度の反ユダヤ主義のイデオロギーや政策が、侵略戦争の拡大とともに、「この世からユダヤ人はいなくなるべし」という絶滅計画へとエスカレートしたのである。クリストファー・ブラウニングが『普通の人びと』で解明したように、ハンブルクの中年の所帯持ちからなる第101警察予備大隊の隊員たちは、軽度の反ユダヤ主義にすらあまり影響されていなかったにもかかわらず、ユダヤ人の女性、子ども、老人を射殺した。彼らがごく普通の市民から血なまぐさい人殺しへと変貌した理由として、①射殺の命令が突然で、拒否の可能性を熟考する時間がなかった、②仲間に臆病者と思われたくないという「順応への圧力」があった、③自分一人が不服従を唱えても、どうせこれらのユダヤ人は死から逃れられないと、殺害を合理化した、といったことをブラウニングは挙げている¹⁸⁾。

目の前にいる何も悪いこともしていない無力なユダヤ人を射殺することほど心理的抵抗が大きい形態であれば、ホロコーストへの協力は広範に見られた。たとえば国鉄職員の水・ヒルゼは、アウシュヴィッツへの「移送品」をコントロールしていたが、それでも

自分は几帳面で非の打ち所のない公務員と思っていた¹⁹⁾。トップフ&ゼーネ社は焼却炉を製造していた普通の企業だが、そのエンジニアだったクルト・プリューファーは決して熱狂的なナチではなかったにもかかわらず、SSから命じられたわけでもないのに、効率よく遺体の処理ができる二重マッフル炉を開発し、特許申請も行なった。焼却炉の建設の際には、もちろんトップフ&ゼーネ社の社員は数ヶ月間アウシュヴィッツで勤務し、自分たちの商品が何のために使われているかを熟知していた。だがそれは、彼らにとって大きなビジネスチャンスに過ぎなかったのである。2005年に「〈最終的解決〉の技術者たち——トップフ&ゼーネ社。アウシュヴィッツの焼却炉建設者」という展示会を企画したフォルクハルト・クニッゲは、その点に関してこう述べている。「トップフ&ゼーネ社の事例が私たちに困惑させるのは、SSとの殺人的協同を坦々と実施していた点である。つまりナチの人種差別的な社会像や人間像の最も過激な帰結である絶滅を受け入れていながら、それに対応するような世界観に基づく動機付けが、会社の主要な関与者の側には認められなかったということである」²⁰⁾。

こうした歴史的事実は、人間の道徳というものに深刻な問題を投げかける。私たちは通常、感情的であれ理性的であれ、とにかく各人の主体的判断に基づき、自由に行動していると信じている。道徳的な行動を取るか非道徳的な行動を取るかは、一人一人が良心にかけて主体的に判断できるはずだとされている。だからこそ意図的に人を殺せば「殺人」となり、誤って人を殺してしまった「過失致死」より重い刑罰が科せられるのだ。だがホロコーストが示したのは、同じ人間であっても、自分たちの共同体に属さない者には道徳的配慮を停止すること、自分が属する集団が暴徒と化した場合、自分一人だけ犯罪に加担しないではきわめて難しいこと、そのため強烈な悪意がなくても人間は蛮行を犯してしまうということに他ならない。人間の主体性は意外に脆弱で、私たちの判断や行動がその場その場の状況によって大きく左右されることを、ジンバルドやミルグラムの実験は実証しているので、次にそれを見てみよう。

2) 道徳的主体性に関する実験

① 刑務所実験

1971年にスタンフォード大学のジンバルドが行なった刑務所実験は、人間の道徳的判断や行為が、私たちが通常想定しているほど主体的ではないことを明らかにしている。元々この実験は、被験者をランダムに囚人役と看守役に分けて模擬刑務所に入れ、2週間の予定で両者の行動を観察するというものであった。囚人役は下着を付けず、スモックを着て、坊主頭に似せるために頭にはストッキングをかぶる。足には鎖を付けられ、名前ではなく番号で呼ばれる。看守役は棍棒を持っているが、体刑は絶対に禁止されている。また匿名性を確保するために、看守役はサングラスをかける。もちろん被験者は普通の大学生で、心理テストを受けて正常と判断された者ばかりである。にもかかわらず、実験2日目に囚人役が反抗をしたのをきっかけに、看守役は虐待を始めた。彼らは規則に従って直接の暴力は振るわなかったが、裸にする、食事や毛布を与えない、無意味な腕立て伏せをさせる、点呼で睡眠を妨害するなどして、精神的、肉体的に囚人を苦しめた。看守役が非人間的な

悪事に走ったのに呼応して、囚人役の方も抵抗する気力すら無くし、人間性を喪失して行った。結局、この実験は6日で中止された。

もし囚人役と看守役のメンバーを交代してこの実験を実施したとしても、同様のことが起こっただろう。冷酷な所業を生み出したのは、一人一人の悪意や反社会的性格ではなく、一方が他方に対して圧倒的な優位に立ち、虐待しても罰せられる恐れがないという社会的状況なのである。看守役となった学生たちは、これまでサディスティックな方法で赤の他人を身体的・精神的に傷つけたことなどなかっただろう。彼らも一般の人々と同様、自分は道徳的にまっとうな人間だと考えていたはずだ。しかしそれは堅固な倫理観を内面に確立していたからではなく、他者との対等な関係、周囲の監視の目、罰則規定といった外的要因が、そのような野蛮な行為を抑止してくれていたからに過ぎない。私たちの道徳性は自律のように見えて他律なのである。そのため外的状況が抑止力を失うと、普段なら考えられないような犯罪性を発揮してしまうのだ。

この実験は2001年にドイツで〈Das Experiment〉(邦題は『エス』)というタイトルで映画化され、人間の心の奥底に潜む悪を如実に描き出した作品として話題になった。ドラマチックに仕立てるためだろうが、実際の実験経過とは異なり、映画ではレイプや殺人まで起こる。あまり知られていないが、そんな虚構を交えずとも、もっと恐ろしい点がこの刑務所実験にはある。それは実験の終わり方で、実は実験主任のジンバルドは6日目の時点で、実験を終えるつもりは毛頭なかったのである。看守役はサディストになり、囚人役は無気力になって生氣すら失っているにもかかわらず、いやそれほど被験者の変貌が激しかったからこそ、実験成果に期待ができると思っていたからだ。中止を提言したのは、事前の約束通り6日目に被験者の面接に来た心理学者のクリスティーナ・マスラクである。彼女は当時ジンバルドと親しく付き合い、後にその夫人となる女性で、被験者だけでなくジンバルド自身の変容にも驚き、周囲に反対されたり馬鹿にされたりするのを恐れつつも、涙ながらに実験を止めるよう訴えた。それを聞いて初めて、ジンバルドは中止を決断した²¹⁾。すなわち実験者自身が実験に巻き込まれ、被験者に対して非人間的な仕打ちをしていることに気づけなくなっていたのである。

②ミルグラムの実験

「アイヒマン実験」とも称せられるミルグラムの実験の基本形は、以下の通りである。まず公募で集まった被験者が先生となり、生徒に単語の組み合わせを暗記させてテストする。生徒が間違えると、先生役は罰として電気ショックを与える。最初は15ボルトだが、生徒が1間違えることに、電圧を15ボルトずつ上げて行く。被験者の先生役には、生徒役は同じように公募で集まった人だと言っているが、実は生徒役はミルグラムの協力者で、暗記テストを何度も間違える。従って先生役は次第に電気ショックの電圧を上げて行かざるを得ない。最高電圧は450ボルトである。生徒役の苦痛を知りながら先生役がどこまで電圧を上げるかを見るのが、この実験の目的である。ミルグラムはこの基本形を様々なアレンジして幾通りもの実験を行なったが、たとえば生徒が壁の向こうにいて、姿も見えず声も聞こえず、ただ300ボルトまで電圧が上がったときに壁を叩くというパターンでは、

先生役の65%もが最高の450ボルトまで電圧を上げ続けた²²⁾。さらに同様の条件下、先生役が暗記テストをするだけで、電気ショックは別の人が送るという実験では、450ボルトまで電圧を上げる割合は92.5%にまで跳ね上がる²³⁾。たとえ自分がレバーを押さずとも、生徒に与えられる電気ショックの強度は同じである。もちろん今、何ボルトの電気ショックが送られているかを、先生役は当然「知っている」。しかしホロコーストで実証されたとおり、知っているだけでは反対行動にはつながらない。むしろ、自分が「手を汚さず」に済むため、免責されるような錯覚を抱き、途中で止めるのがより困難になるのである。

一般にミルグラムの実験といえば、権威に対する「服従」が眼目と考えられているが、「二人の仲間が反逆する」という実験パターンでは、周囲への「同調」、順応への圧力もポイントになっている。この場合、実験開始時には先生役が3人いるが、実際の被験者はそのうち1名だけで、残りの二人はミルグラムの協力者である。そのうちまず一人目が、150ボルトまで達した時点で、また二人目は210ボルトまで達した時点で、電気ショックを送ることを拒み、断固とした態度を取る。この場合、最大電圧まで送る被験者の割合は、10%にまで下がる²⁴⁾。基本形と比較して考察するなら、自分一人では実験の継続をあくまで主張する実験者のミルグラムになかなか楯突くことはできないが、堂々と反抗する人が他にいれば、それに倣って自分も中止を強く主張できるということになる。人間の道徳的主体性はこのように脆弱で、同調によって行動が大きく規定されているのである。ただしこれは逆に言えば、反対運動を起こすリーダーがいれば、普通の人でも非人間的状況の阻止に協力できるということでもある。

ミルグラムは、こうした実験の結果予測に関するデータも集めている。実験について詳しく聞かせた上で、自分ならどうしたかを尋ねたのである。精神科医、大学生、中産階級の3グループに分けてデータをまとめているが、いずれのグループでも100%の人が、途中で必ず実験者と決裂し実験を止めると答えている。何ボルトで中止するかという点については、ほとんどの人が120ボルトから150ボルトと予測しており、最高でも300ボルトである²⁵⁾。調査の対象となった人々は知的レベルが特に低いわけではないのに、なぜ実際の実験結果から大きく外れた予測しかできなかったのだろうか。ミルグラムによると、「これらの被調査者は、自分は感情移入、同情、正義感から反応するだろうと考える。何が望ましいことであるかについての見解を表明し、当然、それに従って行動するだろうと思う。しかし、現実の社会場面で作用しているもろもろの力の網の目に対してほとんど洞察をもっていない」²⁶⁾。つまり、明文化されずとも作用している権威や仲間からの圧力について、たいていの人は無自覚なため、自分の道徳観に基づいて実際に行動できる力を、過大に評価しているのである。

人間の道徳性の過信は、刑務所実験でも見られた。ジンバルド自身も最初は、たった2週間であれほど行動変容が起きるとは予期していなかった。実験の実施を承認したスタンフォード大学の倫理委員会も、看守役がまさかあれほど因業な虐待をやり始めるとは想像もしていなかった。普段私たちが堅固だと信じ込んでいる倫理的信念は極めてもろく、状況によって人間がどれほど行動を変化させるかについて、研究者も倫理委員会も想像すらしていなかったことは明らかである。しかもこうした道徳的過信は、今なお社会に広く蔓

延しているのである。

3) 大量殺戮の正当化

①戦争とホロコースト

ユダヤ人を害虫扱いし、実際に虫けらのように殺してしまったことは、「非」道徳的、「非」人間的で、悪魔のような仕業と考えられがちだが、ことはそれほど単純ではない。何が道徳的で何が非道徳的かは、文化や時代によって異なるからだ。もちろん、「人を殺すな」というのは、『旧約聖書』に基づくキリスト教・ユダヤ教・イスラム教だけでなく、仏教やジャイナ教など東洋の宗教でも基本的な戒めとされている。しかしこれらの宗教道徳が広がっていた国々でも、犯罪者や外敵や異教徒など、自分たちの道徳的共同体に属さない者を、動物扱いしたり殺害したりすることは、当たり前のように行なわれ続けてきた。異端審問や十字軍や魔女裁判では多くの無辜の血が流されたが、加害者は決してそれを神の教えに反した悪行とは考えず、神の栄光をいや増すための「聖戦」と考えていた。第三帝国でも同様に犯罪が正当化・理想化されていたことを、クローディア・クーンズは『ナチの良心』で指摘している。『『人にしてもらいたいことを、人にもしなさい』という黄金律を信じるように育てられ、おそらく私的な生活では多かれ少なかれそれを守っていたにもかかわらず、第三帝国の市民は公共文化に徹底的に影響されたため、ナチズムの一、二の局面に反対していた人々でさえ、人種に基づいた人間の価値のヒエラルキーがあると信じ、総統を崇拜し、領土獲得が望ましいと思うようになったのである。最終的解決は悪の権化として展開したのではなく、むしろ民族的正義の暗黒面として展開した。……高尚な道徳的目的の幻影に囚われたドイツ人にとって、人種的異物の浄化は、困難だが必要な義務になってしまったのである』²⁷⁾。

イエスは「敵を愛せ」と説いたが、キリスト教の歴史が示している通り、それは普通の人間には実行不可能な、その意味で「非人間的な」徳目だった。世界の歴史で現実に通用してきた道徳は、「敵は殺せ」である。罪もない同胞を殺害すれば犯罪者になるが、敵を殺せば英雄になれるというのが、通り相場なのである。それゆえ特定の個人やグループをあらかじめ「敵」と規定すれば、その敵を差別・迫害・絶滅することは正当化され許容されてしまうだけでなく、「英雄的行為」として称揚の対象にすらなりうる。

ナチズムのイデオロギーからすれば、金髪碧眼、頑強で優秀な「アーリア人種」によってのみ構成される共同体の建設が、実現すべき理想であった。ユダヤ人は単に異人種であるのみならず、この共同体を内部から侵蝕し瓦解させる「天敵」だと烙印を押された。ユダヤ人の市民権は1935年のニュルンベルク法で剥奪されたとはいえ、開戦までの主眼は、あくまでこの敵を国外に追い出すことでしかなかった。しかし1939年のポーランド侵攻以来、この天敵をめぐる情勢が一変する。占領地の拡大によって、対処すべきユダヤ人の数が飛躍的に増大したからである。たとえばポーランドには300万人をゆうに超えるユダヤ人が住んでいた。西部攻略が始まり、オランダやフランスにまでナチスの支配権が広がるにつれて、対処すべきユダヤ人の数は増加の一途を辿り、それまでのような国外追放やゲットーへの強制収容も立ち行かなくなる。

さらに1941年に火蓋を切った対ソ連戦は「ユダヤ＝ポリシェヴィズム」打倒のための「絶滅戦争」と位置づけられ、SSの特別部隊が国防軍と共に移動して、共産党の政治委員や党幹部のユダヤ人の殺害からエスカレートして、ユダヤ人の婦女子まで銃で皆殺しにして行った。こうしてホロコーストの第一段階が始まったわけだが、これが侵略戦争の一環だったことに注目しなければならない。またホロコーストの第二段階である絶滅収容所でのガス殺にしても、ソ連や英米との戦争と並行して展開した。通常でも敵を消すことが認められているなら、多くの優秀なドイツの若者が戦地で命を落としている戦時に、天敵であるユダヤ人の殺害に対して無頓着になったとしても、何ら不思議ではない。

②受け入れがたい罪責

上から命令されたり、自国の未来のためと自分に言い聞かせたりして実施した行為が、戦争に負けた途端に「人道に反する罪」に当たると非難されても、多くのドイツ人は納得できなかっただろう。実際、ヒトラーに対する支持は、強制収容所の写真が出回った後でも、さほど衰えていない。アメリカ国際委員会が実施した調査によると、「1952年、西ドイツで〈ナチの見解には悪いものより良いものの方が多い〉と答えた人は41%だったのに対し、〈良いものより悪いものの方が多い〉と答えたのは36%に過ぎない。その時点では21%が、〈第三帝国でユダヤ人に起きたことは、一部、彼ら自身に責任がある〉と考えていた」²⁸⁾。

戦後、辛くも生き残ったユダヤ人がPTSDに苦しみ続けたのに対し、加害者側が悪びれもせず平然としていられたのはなぜなのか。彼らは血も涙もない悪魔なのか。ユダヤ人やシンティ・ロマのジェノサイドには、多数のドイツ人が直接的、間接的に関わっていた。ナチ党の党員数は1943年には800万人を超えていた。平時であれば、人間1人を殺したとすれば、本人も少なくとも自分の犯罪だと自覚し、後悔が生じるのが普通だ。しかしホロコーストに関しては、そうはならなかった。ギュンター・アンダースはその心理を次のように分析している²⁹⁾。まず、異様に聞こえるかもしれないが、大虐殺に携わった人々は、「犯罪を自分自身の所業と感じていないし、自分が犯人だとも認識していない」。なぜなら「ほとんどの犯罪が上位者の命令（ないし「許可」）により、『皆と一緒にした』からである」。直接の実行犯ですら罪責感をもてないのだから、ましてやチクロンBの製造者のような間接的な共犯が、自分は無実だと感じてもおかしくはない。一般的な犯罪とは異なり、ホロコーストは規模が余りに大きいので、「殺された数多の人々を覚えておくこともできないし、それどころか……真に認識することも不可能」となる。さらに「人間は言語化できることしか記憶できない」。「加害者は自らの悪行について、何十年も語っていない。語らないことは、明日になれば思い出せなくなり、明後日になれば無かったも同然になってしまうのである」。

戦後のドイツで後悔や罪責感が見られなかった理由として、無力な一般市民の大量殺戮なら連合国軍も犯していたことも挙げられるだろう。その点に関して、ジョージ・クレンは「ホロコースト——道徳理論と非道徳的行為」という論文で、大量虐殺に至る人間の心理は、ドイツ人もイギリス人もアメリカ人も同じであることを指摘している。「実行者の立場からすれば、ハンブルク・ドレスデン・ヒロシマ・ワルシャワ・ロッテルダムなどの

都市で行なわれたように、無防備な市民を爆撃で大量に殺害することと、銃やガス室による大量虐殺との間には、本質的には様式の差異しかない。どちらも心理的要件は似ている。行為を命じる権威の正当性を快く受け入れ、その行為が何か価値ある卓越した目的に役立つと信じ、さらにおそらく『奴ら』はそのような行為を受けるに値すると確信していることが、どちらの実行者にも必要である」³⁰⁾。敗戦で国家の威信がずたずたにされた上に、勝利者が犯した同様の「人道に反する罪」は追及されなかったので、なおのことホロコーストに対する罪責や後悔の感情をドイツ人が抱きにくかったことは、想像に難くない。

さらに、自分が犯したことを直視し、その過ちに気づいて後悔し、未来に向けて新たな行動を起こすには、自分のかつての思念や行動を被害者の視点から見つめなおし、新たな価値観を構築する必要がある。そのようなことは、よほど強靱な精神力の持ち主でなければできない。その上、このような深い反省を実行するには、安定した自己肯定感が不可欠だ。ナチのプロパガンダに踊らされて馬鹿げた人種主義を信じ込み、おぞましい犯罪をしてしまったと認めることは、プライドを粉碎し、アイデンティティを崩壊させて、人を自殺にまで追い詰めかねない。そんな愚かな自分でも更正して新たな生き方ができるという、自分自身に対する信頼や自己肯定感がなければ、精神的に血まみれになるような反省の作業は不可能である。そう考えると、ホロコーストの加害者の中で、後悔や改悛の情を見せた人がほとんどいなかったことも、不思議ではない。

4) アウシュヴィッツ以後の道徳に向けて

凶悪な無差別殺人事件が生じると、犯人の人間性が疑われ、〈良いことと悪いことの違いぐらい誰にでも分かるはずだ〉という非難が噴出する。しかし、いい大人が積分の問題を解けなくても、誰も非難したりしない。まるで道徳的な判断力・実行力は生得的で、数学の能力より単純であるかのように思われている。しかしホロコーストや様々な心理学の実験が示した通り、普通の人間の道徳性は決して強固なものではない。さらに、目指すべき徳目そのものが、共同体に属さないものを迫害、虐待、殺害することを推奨することすらある。アウシュヴィッツから学ぶべきことの一つは、私たちの道徳的過信をなくすことであろう。

ただし、大多数の人間がナチズムに熱狂しジェノサイドに抵抗しなかった中で、あえて個人の信念を貫き、命がけて主体的行動をとった市井の人がいたことも事実である。ゴートン・C・ザーンが「第三帝国の平和主義者」³¹⁾で指摘しているように、ミヒャエル・レルプシャーはカトリックとして、「アドルフ・ヒトラーに無条件の服従を誓う軍の宣誓を拒否」したため死刑となった。オットー・シメクは、ポーランド市民の人質を射殺する命令に従わなかったため、軍法会議にかけられ処刑された。オーストリアの農夫、フランツ・イエーガーシュテッターは、友人や家族の懇願、神父や司教の助言にもかかわらず、「監獄も足枷も死の宣告も、人から信仰と自由意志を奪うことはできません」として軍務を拒否し、斬首された。

こうした「英雄的行為」はあくまで例外であったにしても、世間の流れに抗して自らの倫理観を貫く人間の可能性を示している。もちろん、第三帝国で生まれ育ち、差別的な人

種イデオロギーしか教えられなかった子どもたちは、体制への不服従という選択肢の存在に気づくことすら難しいだろう。だからこそ、ジェノサイドに限らず、国家や社会が一方に暴走することを防ぐためには、個人がそれらの集団とは別の価値判断を持てるようにしなければならないのである。

この点について、アーヴィン・ストープは『悪の根源』で次のように論じている。「私が集団からの分離や差異化の重要性を強調するのは、自己や自己の必要と利益を大事にせよと主張したいからではない。他者への気配り、連帯、共同体といった理想を実現するためには、人々は集団とは別の強いアイデンティティを育てなければならない。さもなければ、集団から離れて独立した道徳的判断を下したり、必要なときに集団と対立したりすることができないのである」³²⁾。ストープはさらに『善悪の心理学』で、アイデンティティのタイプをまず①「自律・個人主義的」、②「関係・集団的」の二つにわけ、②をさらに「埋没型」と「連帯型」の二つに下位区分して、ジェノサイドにおける個人のアイデンティティの役割についてユニークな分析を行なっている³³⁾。それによると、集団が特定のグループを対象に迫害や殺害を始めたとき、それに歯止めをかけられるのは①の「自律・個人主義的」アイデンティティの持ち主のように思えるが、このタイプは自分の思い通りに行かなくなると挫折感を強く感じ、人との繋がりが下手なため困難に一人で立ち向かおうとするので、集団の潮流を大きく変えることはできない。②のうちの「埋没型」は集団が取る方向に同調するので、差別状況を悪化させてしまう。しかし「連帯型」アイデンティティは人との繋がりを大切にするが、他者から離れて自立もできる。そのため、埋没型より集団の言いなりになりやすく、①の「自律・個人主義的アイデンティティ」より他者を動かせるので、ジェノサイドへの流れを阻止する可能性が高い。

どのようなアイデンティティを持つかは、もちろん個人の資質と選択によるところもあるが、社会化の過程によっても大きく左右される。ストープの区分に依拠するなら、日本は伝統的に「埋没型アイデンティティ」を良しとしてきたが、最近では「自己責任」が強調され、「自律・個人主義的アイデンティティ」の育成へと方向転換してきているように思われる。しかしアウシュヴィッツを繰り返さないためには、そのどちらでもない連帯型アイデンティティを作り上げるような教育的工夫と社会的支援が必要なのである。その具体的な方策については、また稿を改めて論じたい。

注

- 1) 石田勇治編集、『資料 ドイツ外交官の見た南京事件』、大月書店、2001年、58ページ。
- 2) 同上、85ページ。
- 3) Zigmunt Bauman, *Modernity and the Holocaust* (New York: Cornell University Press, 1996), p.152.
- 4) Robert Gellately, *Backing Hitler* (New York: Oxford University Press, 2001), p.257.
- 5) *ibid.*, pp. 256-258.
- 6) *ibid.*, p. 263.
- 7) イアン・カーショー、石田勇治訳、『ヒトラー 権力の本質』、白水社、2003年、88ページ。
- 8) 同上、136ページ。
- 9) Eric A. Johnson, *Nazi Terror* (New York: Basic Books, 2000), pp. 437-459.
- 10) Günther Anders, *Besuch im Hades* (München: Verlag C.H. Beck, 1996), S. 198.

- 11) *ibid.*, S. 201.
- 12) ヒュー・G・ギャラファー、長瀬修訳、『ナチスドイツと障害者「安楽死」計画』、現代書館、1997年、160ページ。
- 13) 同上、276ページ。
- 14) Nathan Stoltzfus, *Resistance of the Heart* (New York / London : W.W.Norton&Company,1996).
- 15) Daniel Jonah Goldhagen, *Hitler's Willing Executioners* (New York: Vintage Books, 1997).
- 16) イアン・カーショウ、前掲書、71-72ページ。
- 17) ラウル・ヒルバーク、望田幸男他訳、『ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅』(上巻)、柏書房、1997年、32ページ。
- 18) クリストファー・ブラウニング、谷喬夫訳、『普通の人びと』、筑摩書房、1997年、113～115ページ。
- 19) Hermann Langbein, *Menschen in Auschwitz* (München: Europaverglag, 1995), S. 752.
- 20) *Techniker der "Endlösung"*, Begleitband zur Ausstellung, Stiftung Gedenkstätten Buchenwald und Mittelbau-dora, 2005, S.10.
- 21) Philip G. Zimbardo, Christina Maslach, Craig Haney, Reflections on the Stanford Prison Experiment: Genesis, Transformations, Consequences, in : Thomas Blass(ed.), *Obedience to Authority* (New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates, 2000), pp 193-237.
- 22) スタンレー・ミルグラム、岸田秀訳、『服従の心理』、河出書房新社、1995年、57ページ。
- 23) 同上、162ページ。
- 24) 同上、162ページ。
- 25) 同上、49ページ。
- 26) 同上、50ページ。
- 27) Claudia Koonz, *The Nazi Conscience* (Cambridge, Massachusetts and London: The Belknap Press of Harvard University Press, 2005), p. 273.
- 28) Jonathan Petropoulos, Holocaust Denial: A Generational Typology, in : Peter Hayes (ed.), *Lessons and Legacies III* (Illinois: Northwestern University Press, 1999), p.241.
- 29) Günther Anders, *ibid.*, S.190-194.
- 30) George M Kren, The Holocaust: Moral Theory and Immoral Acts, in : Alan Rosenberg and Gerald E. Myers (ed.), *Echoes from the Holocaust* (Philadelphia: Temple University Press, 1988), p.253.
- 31) Gordon C. Zahn, Pacifists during the Third Reich, in : Michael Berenbaum (ed.), *A Mosaic of Victims* (New York and London : New York University Press, 1990), pp.194-199 .
- 32) Ervin Staub, *The Roots of Evil* (New York : Cambridge University Press, 1992), p.148.
- 33) Ervin Staub, *The Psychology of Good and Evil* (New York : Cambridge University Press, 2003), pp. 354-355.